SENSEWARE
——感覚の世界地図を拡げる

原研哉
グラフィックデザイナー
武蔵野美術大学
基礎デザイン学科教授

人間の創造性を刺激し、覚醒させる“媒質”。
日本から発信する“センスウェア”が、
世界の注目を集めている。

原研哉先生は「言葉・身体・環境」を巡る 4 つのテーマについてお話をくださいました。ハプティック(Haptic)、センスウェア(Senseware)、エンプティネス(Emptiness)、デザイン(Design)。「環境の感覚というインタラクティブなものの中心に人間がいて、その関係からデザインを考えられるのではないか」と、ご自身のデザイン観からレクチャーの口火を切られました。

最初の"Haptic"は、人間の感覚をぞくぞくさせる、触覚を刺激するもの。原先生は、このハプティックをテーマに 2004 年に展覧会を開催されて、ご自身のデザインが新たに覚醒していく大きなきっかけを得られたそうです。

「HAPTIC 展　五感の覚醒」では、約 20 人のトップクリエイターが集まり、人をハプティックに刺激するモノづくりが多様に試みられました。紹介される作品は、歯ブラシのように毛が植わった Haptic のロゴ、長い毛が垂れるように生えた提灯、杉苔が緊密に植わった下駄、柔らかくすべすべした人の皮膚のような素材でつくったコンセントタップ、バナナやキウイそっくりのジュース・パッケージなど。どれもエッ?と、不思議なショックを感じるモノばかり。

原先生は各作品の意図に触れ、背景にあるデザインの考え方を教えてくださいます。「山のシューレ 2009」のテーマ「言葉・身体・環境」へのアプローチのひとつとして、「現在は人間がいかに感じるかと、モノを作ることがつながっていない。モニターのなかでモノを掴まえ過ぎているからではないか。人間的な幸せは、もって生まれた感覚をいかに豊かに活性化させていくかにある。Haptic という言葉で表現したいのは、そうしたモノづくり」と、解題をしてくださいました。

二番目の"Senseware"は「人間にやる気を起こさせる"媒質"」の話です。原先生は太古の石器に触ると「ちょっと一丁やってやろうかな！」とクリエイティビティを刺激されるそうです。

「石の適度な重さや加工適性など、その媒質があったから人間は石器時代を築けた。人間の意欲だけでなく、モノの側にもその要因があっただろう。人間は進化の節目で、そうした優れた媒質に出会ってきた」。時代が進んで、原先生が注目されるもうひとつの媒質は「紙」です。「紙は真っ白である、指で持つとピンッ！とまっすぐになる張りがある。輝くような白い上に真っ黒い墨で図や字を書くことは、取り返しのつかない行為。紙がもつこの切実さが、やる気をよび起こしてくれる」。

紙をたんに印刷媒体と見るのではなく、新しい創造への貴重な"媒質"と捉えていくように、次に注目されたのは人工繊維です。「人工心臓や人工血管の素材から、航空機のボディや風力発電のプロペラまでに使える高度で緻密なもの。人工繊維をインテリジェント・ファイバーととらえている」。

2009 年の 4 月、イタリアのミラノサローネ展覧会の期間中、原先生がディレクターを務めて、トリエンナーレ美術館で「TOKYO FIBER '09 SENSEWARE」が開催されました。日本を代表する繊維メーカー各社と建築家、デザイナーらとがコラボレーションした斬新な作品群は大きな注目を集めました。

可塑性が高く自由な立体成型ができる繊維や三層構造で高い伸縮性と強度が共存する繊維は、マスクやベッドやソファなどに新しい機能をもたらします。また炭素繊維とアルミニウムの組み合わせでできた頑丈で世界一軽量の椅子、コンクリートブロックに光ファイバーが組み込まれてできた光を通すブロックなど、未来を感じさせる作品が続々と紹介されます。

「繊維という重厚長大な産業が先端的なクリエーションと結びつく未来を提示した。いっぽうでこの展覧会がとても日本的と評価された。ただし、それはいかにも日本らしい伝統的な要素ではなく、感覚や感性、緻密で繊細で簡潔。そういう日本の新しい特徴に世界から大きな関心がもたれている」。

お話は原先生の捉える"日本"の魅力に入っていきます。そのテーマは"Emptiness"。「デザインは今日的なものだが、伝統を意識せざるを得ない。文化の本質はローカリティにある。日本のコミュニケーションの原像を意識すると、そのひとつが空っぽ、つまりエンプティネス」。

日本人の自然観、伊勢神宮の式年遷宮の仕組み、茶道の文化などを通じて、何もないところに多様な価値を招き入れる日本の文化がもつ原型の可能性に気づかれたそうです。

そして、そのことは最後のテーマの"Design"にも相通ずるもののようでした。「私が目指すデザインは"掃除"のようなもの」。感覚と環境から、とてもデリケートなものが紡ぎだされる。そういうことに目を凝らして物を作っていくのがデザイナーの役割と語られます。

日本人である私たち一人ひとりのなかにある繊細で緻密、丁寧で簡潔な感受性の中に育まれるもの。これこそを資源として意識することがこれからは重要だ、と結ばれました。